



図書紹介 浅井幸子、黒田友紀、杉山二季、玉城久美子、柴田万里子、望月一枝編著『教師の声を聴く』

太田, 知実

(Citation)

研究論叢, 23:73-75

(Issue Date)

2017-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/E0041190>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041190>



4. 図書紹介

浅井幸子・黒田友紀・杉山二季・玉城久美子・
柴田万里子・望月一枝 編著
『教師の声を聴く—教職のジェンダー研究からフェミニズム教育学へ—』

太田 知実 (神戸大学大学院博士後期課程)

本書の発端は、佐藤学ゼミ(東京大学)で行われたフェミニズム教育学に関する文献読解である。今では各分野で(教育方法学、教育実践史など)活躍する佐藤氏の門下生の女性研究者6名が、10年にわたり、分析枠組みを理論的深化させながら現職教師の語りの検討を行い、教職に潜むジェンダー問題の実態に深く切り込んでいる。序文を寄稿した佐藤氏によれば、本書は「教職において教師であり女性であることは何を意味しているのか」という根本的問いに対峙し、「教職におけるジェンダーの所在とそのポリティクスを探究した最初の本格的な研究成果」である。

本書の構成は以下の通りである。

序章 教職におけるジェンダーへの問い
1章 学年配置のジェンダー不均衡
—男性は高学年に、女性は低学年に—
2章 トレーニングを超えて
—男性教師の低学年教育の経験—
3章 女性教師の声を聴く
—低学年教育の経験を捉え直す—
4章 女性校長はなぜ少ないか
—女性管理職のキャリア形成—
5章 教職の女性化と脱性別化の歴史
おわりに フェミニズム教育学に向けて
特別寄稿 教育学と政治学との出会い

本書の序章はご夫婦で教職についている二人の先生がいかなる学年配置を経験したかについての語りから始まっており、自然に「問い」へとたどり着くよう読者を誘ってくれる。本書の最初の問いは「なぜ小学校低学年の担任は女性教師が多く、中学年、高学年と男性教師が増えていくのだろうか。その現象は教職のジェンダーをどのように表現し、あるいは構成しているのだろうか」である。

本書の主題は「性別を捨象しながら、そのことによってセクシズムを再生産する学校を生きる教師達の多様な経験を記述し、セクシズムを超えて新たな教育の関係を構想する道筋を探ること」である。

具体的課題としては、ジェンダーの観点から次の三つに取り組む。第一に、学年配置の装置と管理職への昇進の制度や文化に内在するジェンダー差別を可視化する。第二に、小学校の教職において、高学年教育に比べ従属的なシャドウ・ワーク化している低学年教育を女性教師と男性教師がどのように経験しているのかを描く。

第三に、これらを通して以下の二つの方向性で教育のオルタナティブを探る。一つ目は、教職のジェンダー差別の解消によって、低学年教育が従属的な仕事となる構造を解体する方向である。また、昇進の制度と文化の考察は、その変革を通して管理職のあり方を再編する可能性を導く。二つ目は、女性教師の経験に異なる価値を見出すことによって、学校文化のジェンダー差別を根源的に問う方向である。

研究の方法としては、一章から四章までは、ライフヒストリー／ストーリー研究法を採用している。ここで本書の特徴として注目すべ

きは、ライフヒストリーにおける女性と男性の語りを対置することに伴う問題と、その問題を超える方途を、フェミニズム教育学者であるグルメット、M.による「多声」の議論に依拠して考察している点である。

いささか難解なグルメットの提起をひきとって、筆者らは、研究者自身の声の複数性に注意を払う。すなわち、研究者としての「私」がどのような教育研究の政治的関係のなかで言葉を紡いでいるのかが問われ、そこにおいて「私」の研究の主体もその言葉の意味も解体され再編されていることに注視し、その過程を省察することが求められるとする。

この研究方法が特に生かされているのは、本書の第一章から第三章にかけてだと思われる。ここでは、女性教師12名と男性教師10名のインタビューから学年配置と低学年教育を問うている。

第一章では、低学年教育が理不尽にシャドウ・ワーク化する様相を描出している。高学年担任は対外的行事が多く「学校の顔」となる。そのため、管理職の意向に合わない教師は高学年には配置されない。よって高学年の担任に配置されることは有能である証となり、管理職への昇進ルートにも近づく。一方、高学年は多忙で激務のため、より体力のある男性教師が好まれる。逆に育児負担の予想される女性教師は、希望を出したとしても高学年には配置されにくい。これらの要因により、低学年教育は担い手の女性化とともに、高学年教育の陰に置かれるという。

こうした状況を踏まえ本書は低学年教育の価値の再評価を試みる。低学年担任に女性教師が多いのは、時間的体力的理由のみならず、家父長制規範に基づく母性イメージの押し付けといった側面もあるとする。これは、生活習慣のしつけという基礎基本の教育は女性の担うべきもの、という認識を指している。細やかなケアを必要とするという点で「女性性」

への期待とも読み取れ必ずしも否定的に捉えるべきものではない。しかし、学校教育において適切に積極的価値を見出されてきたとはいえない。そこで、第二、三章では、男性教師と女性教師の低学年教育に対する語りから、その意義の捉え直しを図っている。

第二章では、男性教師を低学年教育の担い手の外部者として捉え、彼らの低学年教育の語りを描く。彼らは、低学年教育を、しつけや訓練といった“規律化”を行うための「トレーニング」が要求され、独自の実践を行っていくものとして描く。しかし、複数回低学年を経験した男性教師の語りからは、幼い子どもたちの知性、とりわけ創造性や身体表現の柔軟性に依拠した実践が可能であることを発見し、単なるしつけ・訓練としての低学年教育を乗り越える契機を見出していた。

第三章では、当の担い手としての女性教師による低学年教育についての語りを分析している。若干単純化したものとはなるが、本章での議論を整理すると次のようになる。女性教師は低学年教育について、「トレーニング」ではなく、子どもに対する細やかなケアとして描く。当初筆者らはそう予想していた。だが女性教師にとっても、低学年教育はやはりトレーニングであった。しかし、それは同時に“ケアとつながり”の物語としても語られた。つまり“規律化”の営みに子ども同士のケア・つながりの創出という新たな意味を見出していたのである。筆者らは、ここに新たな教育の可能性を見出す。子ども同士が、そして教師と親、教師同士が弱さを共有することで連帯しうる可能性である。なるほど、と膝を打つ一方で、こうした連帯を身内だけに閉じず、多様性・公共性へと開くことが次なる課題とも思われる。

第四章では、女性管理職の少なさの要因を、各小学校におけるミクロな人間関係に注目して分析している。管理職へのキャリアパスは、

先輩管理職の評価に大きく左右される。その判断がいかに社会的・歴史的に形成されてきたジェンダー規範に影響を受けているのかを分析している。

第五章では、教職の女性化と脱性別化について、その議論の歴史を丁寧に追い、現在の小学校におけるジェンダー意識の原点を探るかたちで考察を行っている。

最後に、本書の筆者らが絶えず応答を行ってきた、政治学の分野でフェミニズム理論を研究する岡野八代氏の問題提起を、本書の立場にあてはめて次の言葉で締めくくる。

「フェミニズム理論から新しい教育を構想することは可能だろうか。女性の経験から紡ぎ出された思想から、あらゆる子どもと教師の可能性が広がるような学校教育を描き出すことができるだろうか。本書はその試みの出発点である。」

本書は、社会的・歴史的なジェンダー規範が教職にも大きく影響していることを問題視しながらも、女性教師を過度に擁護し男性教師の価値・意義を真っ向から否定しようとするものではない。しかし、暗黙裡に「男性性」が優位に立ち、時にかき消されそうになる女性教師の声の存在を指摘し、それを聞き取ることに注力することで、従来とは異なる教育の意義・可能性の発見とともに教育研究の枠組みの問い直しをも目指している。

本書から多くのことを学ぶことができる。第一に実態解明の成果として、現場教師の声が丁寧に描かれており、現場教師の本音や苦悩が鮮明に伝わってくる。第二に本質探究への姿勢として、教師の複数の「声」に注目することで、単なるジェンダーの問題提起に終始するのではなく、そこを出発点に、教育の普遍的意義や教育研究の枠組みを問い直そうとする姿勢に感銘を受けた。第三に語りの具体的叙述上の工夫として、本書独自の分析道筋が明示されており、発想の転換箇所が複数

含まれているため、知的刺激に富んでいる。教育学研究者や教育実践家をはじめ教育にかかわる全ての者に一読をお勧めしたい一冊だといえる。

(学文社刊 2016年10月発刊 本体価格 3,200円)